大東亜戦争と学童疎開

山添　宏（電化会）

かって故岡部君からこんな話を聞いた。「我々昭和９年生まれは不思議な学歴の持ち主なのだ。即ち小学校と云う学校へ行ったことがない。１級上は入った時、１級下は出た時には小学校であったが、我々は入学から卒業まで全部国民学校なのだ。」　そしてこの世代が後に述べる「激動の昭和の１ページ、学童疎開」の主役となった。

入学した昭和１６年４月はまだ戦争は始まっていなかったが、物が配給制だか切符制だかでだんだん不自由になって来たのは子供ながらにもわかった。

１２月８日、戦争が始まった。その開戦からわずか４ヶ月しか経っていない翌１７年４月１８日、空母ホーネットから発進したドーリットル中佐指揮のノースアメリカンＢ－２５中型爆撃機１６機によって東京が空襲された。当時私は大岡山国民学校の２年で目黒区平町なる所に住んでいたが、その時の事は良く覚えている。

真っ黒な敵機が低空で逃げて行き、その後を日本軍の戦闘機が３機で追尾して行った。これも低空だったから固定脚が良く見えた。この頃、陸軍の新鋭機「隼」は前線に配備され帝都防衛は旧式の九七式戦闘機だったから、既に投弾し身軽になった B-25 を捕捉出来ず、また高射砲も１発も当たらずで結局来襲した 16 機を１機も落とせなかった。だが、大本営は９機撃墜と云う“戦果”を発表した。しかし幸か不幸か衆人環視の中の出来事であったから、撃墜すれば見えるわけだが、見たものは一人もいなかった。後に誇大報道の代名詞となった「大本営発表」はこの時、すでに始まったと云える。

空襲による被害は微小であったが、日本本土上空にやすやすと米軍機の侵入

を許してしまったこと。防空体制の実態が実に poor であったこと。などなど大きな問題提起となった。勝ち戦から負け戦への一大転機となったミッドウェー作戦もこの空襲がもたらした「焦り」と云われており、アメリカの心理作戦の大勝利であった。

特に空襲は国内の現実の問題となり、その諸対策の一つに疎開がある。

政府は昭和１９年６月３０日の閣議で京浜・阪神・中京・北九州の各工業地帯の１３都市の国民学校初等科３年生から６年生までの学童を地方に集団疎開させる「学童疎開促進要項」を発表、即実施となったが家庭にはそれぞれ事情が有り、例えば親が兵隊に取られ手不足となった家内工業などでは子供が貴重な働き手となっていたし　費用の面も。１人月額２０円。半分は国庫負担で親の負担は１０円の筈だったが、実際は後援会とか余計なものが出来て更に５円、１０円と追徴された。物の本によれば当時大工の１日の手間賃が４円。巡査の初任給が月額４５円だったそうだから、子供が２人ともなると親の負担はけっして楽なものではなく、払えないなどなどの理由で疎開に行けない子も出てきた。

そんなこんだで疎開児童の数が計画数に達しないためか東京都は大達東京都長官が校長を集めて次のような異例の訓示を行った。「帝都の学童疎開は将来の国防力の培養でありまして学童の戦闘配置を示すものであります」。つまり子供を次の戦闘のための消耗原材料としか見ていないわけだ。この人物は戦後吉田内閣に文相で入閣したがよくこんな冷酷な男を文相にしたものである。

ところで、どの学校をどこに疎開させるかは、大体どの汽車のターミナル駅に近いかで振り分けたらしい。例えば世田谷、目黒、大森は新宿からの三多摩、山梨、長野といった具合である。と云うわけで我が目黒区大岡山国民学校の疎開先は６年生は山梨県甲府市、５・４・３年は北巨摩郡韮崎町に決まり、まず甲府組が先発。１９年９月５日韮崎組約２６０人が出発した。この日から敗戦後の昭和２０年１０月２４日帰京するまでの４００日が辛い日々であったから、その起点である「９月５日」と云う日は児童１人１人の頭に強烈に焼き付いて絶対に忘れなかった。

韮崎駅を降り立ったら町の人々が出迎えてくれ、韮崎国民学校の代表が歓迎の辞を読み上げてくれたが「おおおかやま国民学校の皆様・・・」と云う発音（この方が正しいのだが）が日頃「おーかやま」と発音していたのでヘンに感じた。

山梨県は例の「山があっても山ナシ県」でその実、全面積の８０％が山岳地帯の上、土地が痩せていて韮崎などは桑畑と蕎麦畑だらけであった。しかし山梨の絹は甲斐絹と呼ばれた上質の絹であったから、韮崎には日本のシルクロード甲州街道（略国道２０号線）を往還する絹商人のための宿屋が何軒かあったので疎開学童を収容出来たわけだ

疎開の生活は、規律規律であたかも音に聞く軍隊のようで、戦況が不利になる程、ますます軍国主義的にエスカレートしていった。

学校は韮崎国民学校の一部を借り、二部授業が主であったが、ここの校長は「軍国主義が国民服を着た」ような人物で、朝礼の時、姿勢が悪いといって張り倒された子もいた。この行為に対して間借りはしていても他校の生徒ではないかと反感を持った子も大勢いたようだ。

学校から宿に帰ると、腹を空かせて遊んでいたが軍事教育もあった。飛行機の形と手旗信号、無電のモールス記号の暗記である。これは見張りと通信兵なら子供でも実戦に使えると云うわけで、このうちモールス記号は・とーの組合せで ・ をト又はトン、–をツー、イロハのイはイトー　・ —、トンツー　ロは路上歩行　・–・–　トンツートンツーと覚える。この教育はすごいもので大人になって真珠湾攻撃が出てくる映画を見た時「我、奇襲に成功せり」の暗号電報が「トクトーセキ　ラムネ　トクトーセキ　ラムネ」と認知出来、ハハァ「トラ トラ トラ」と打電してるなとわかった。

食事はスカスカのどんぶり飯に何だったかよく覚えてはいないが茄子の煮たのとかおかずは付いていた。南瓜が多かった。（山梨の名物「ほうとう」は南瓜の権化みたいだから今だに食べる気がしない。）とにかく満腹感をおぼえたことは一度もなく補助手段を必死に構じた。御多分にもれず「薬」、エビオス、わかもとの類（消化薬だったから、ますます腹がすいた）はもとより、蛙、

かいこの蛹、絵の具まで舐めた。黄色が一番甘かった。

この内、蛹は熱風乾燥したのかカサカサしていて指でつぶすと粉になった。この頃韮崎は養蚕が経済の柱であったから繭の入った大きな布袋をいくつも積んだ馬車（トラックでなくてよかった）が宿の前の道路を通る。この後をつけて行き、肥後守と称するナイフで袋を割き繭をポケットに入るだけかっぱらい、繭をナイフで開けて中の蛹を頂く。随分と苦情が来たと思うが怒られた記憶はない。子供たちにとって、この蛹は貴重な蛋白源で、このおかげで何とか命がつながったのだから文字どおり「おかいこ様」と云えよう。

児童を統率するのは大岡山の先生であったが男の先生は出征した人も少なくなく若い女の先生（多分代用教員）が補充された。また寮母先生と称する２５才以下ぐらいの女性が１班（約２５人）あたり１人で日常の面倒を見てくれていた。やがて、これらの男女の間に妖しの雰囲気が醸成しはじめ「誰先生と誰寮母」とが「出来ている」とか「ヘンな声を聞いた」とか早熟ガキが言い出した。この後どうなったか？手あたり次第と噂された某先生は終戦、帰宅、離婚となった由。

一方「色気より食い気」の先生方は児童用の特配物資や親が面会に持ってきた差し入れをピンハネしていた。

そのような一部の情けない大人達にひきかえ、子供達の日常は万事が軍隊式であったから規律は勿論のことだが、ヒエラルキーも相当なもので、最上級生の５年生が班長、室長として下級生をグッと押さえ付けていた。応化会の小林正知君の兄、小林大知さんなどは学校では級長、宿では班長であったから、あたかも雲の上の人のようだった。戦後間もなく戦友会のような「韮崎会」と云う集いが出来たが、その幹部連中も全部当時の５年生だった。

戦況が刻々不利になり東京空襲が増えるようになるとラジオのある部屋に集まり「東部軍情報、東部軍情報、敵Ｂ２９の編隊、駿河湾から帝都に向け侵入しつつあり」のアナウンスを皆（東京にいる両親に思いをはせ）無言で聞いていた。

２０年７月、家が福島県白河に疎開してくれたので引き取られて空腹とサヨナラした。ちなみに疎開した４年生の時の体重は２４．５キロ、引き上げた５年の時は２３．５キロ。成長期に反比例した、この数値は終生忘れ難い。

後日談

戦争中は「欲しがりません勝までは」で国民のベクトルが揃っていたが、８月１５日が過ぎると周囲の目がガゼン冷たくなり、１０月引き上げが完了するまでの２ヶ月の方がいろいろとあったらしく３人が栄養失調で亡くなった。ただ救いは空襲による被害が意外に少なく（例の１０万人が殺された江東深川のように家屋が密集していなかったので、）私の家も小林君の家も焼け残った。前出の「韮崎会」で会うと今でも「お互い浮浪児にならなくて良かったなあ」と出る。

以上